俺と姉御は｜許婚《いいなずけ》！

夢見る卵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と姉御は許婚（いいなずけ）！

【Ｎコード】
Ｎ０２１９Ｙ

【作者名】
夢見る卵

【あらすじ】
「鉄拳」の二つ名を持つ天上時明は、偶然彼の通う学校の生徒会長・有明美鈴を助け、家が有明組という組だということを知る。助けた次の日に彼女がクラス全員の前で「許婚になってください」と爆弾発言。どうなる明の学校生活！

俺とみんなは高校生（前書き）

初めての投稿です。拙い部分もあると思いますが、どうぞよろしくお願いします。

俺とみんなは高校生

「起きろー！」
朝一番からこの元気すぎる声は俺には少々つらい。しかし彼女、沢(さ)峰真由(わみねまゆ)にとってはそんなことは関係ないらしい。
「今日始業式でしょ！　恥かくのは幼馴染のあたしなんだから、早く起きろってばこのバカ」
ついにはバカ呼ばわり、このままだと何されるかわからないので俺は、
「分かった今起きるよ（「恥をかくのは幼馴染に限定する必要があるのか」とは言わなかった。）」
と言って素直に起きた。
「じゃ外にいるから。」
彼女はすぐに外へ行ってしまった。
では、この準備の間にこの俺、天上時明(てんじょうじあきら)について説明しよう。
俺はこの春高校一年生になるちなみに家族は、姉が一人と妹が一人いるがこの二人の説明はまたの機会にということで、今は総合武術の名をかたる道場をしている。父と母は「己を鍛えなおす」とか言って2年前に出て行った。ではなぜ姉妹がいるのに幼馴染が俺を起こしに来るのか、それは俺にもよく分からない。小学校5，6年のころからだったような気がする。姉も妹も早起きということでもう家にはいないからだろうかと最近になって思っている。とまぁこんな普通の生活だ。
「待たせて悪かったな」
玄関を開けると真由が待っていた。開口一番の台詞が、
「行くわよ、このバカ」
これだ、ため息しか出てこない。黙ってたら美少女で通用しそうな見た目なのに…と思ってしまう。
ということで、学校までの道のりが始まった。ちなみに俺たちが通

う「桃山学園高等学校」は私立だったのが公立に変わった学校だ。
その理由が今の学園長がもっと多くの生徒にということで、授業料が破格だからだ。そして通学路で会うのは真由を除いて大体三人、
「おはよ～、明」
「おはようございます。明さん」
「よっ、鉄拳」
最初に声をかけたのが、本田舞（ほんだまい）中学の時から一緒の友達だ、特徴は美少女だ。
次に声をかけたのが、これまた美少女の花園麗香（はなぞのれいか）こいつは家が神社で学校から帰ると巫女姿になっているらしい。らしいというのは俺は一度も見たことがないからだ。
そして俺を「鉄拳」と呼んだこの男は川野新太郎（かわのしんたろう）だ。小学生の時からの悪友で、俺の一番嫌いな呼び方をする。
「だから鉄拳はやめろって言ってんだろうが」と俺
「え～、明から鉄拳をとったらいいところ無くなるじゃん」と新太郎
「そ、そんなことないですよ新太郎さん」なぜか麗香
「そうよそうよ」と舞
「明にだっていいところほかにもあるわよ、このバカ」でなぜか真由
「それよりも鉄拳を否定して欲しいんだが…」俺は言ってみたが、
「「「それはない（です）。」」」女子陣の反論
「そ、そうか」
そんな会話をしているうちに桃山学園高等学校についた。
「よしっ！行こうぜ！」
新太郎の先導で、俺らは入学式のある体育館に向かった。
◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
体育館に入っての第一印象はその中にいる人の数だった。勿論入学案内には全学年２８０人と書いてあったが、それを上回る関係者の数だった。
「確かにこれは凄いな」
「そ、そうね」

「私もそう思います。」
「うんうん」
なんとか五人がけの席を見つけて俺たちは開会式を待った。
「なぁ、真由今日の予定は？」と俺は隣の真由に聞いた。
「入学式の後、ホームルームで終わりよ」
「そんな～、そんなに早く終わるのかよ。はぁ～～」と真由の隣の新太郎が大きなため息
「なんでそんなに残念そうなのよ」俺の隣の舞
「だってそんなに早かったら女子といる時間が減っちゃうじゃん、今年こそ彼女をゲットしないと」
「「あっそ」」
「あ、あ、あの明さんはどのような女の子が好みですか？」と麗香の質問
「え、俺は」とここで、
「会場の皆さん静かにしてください。」
「また後でな」と俺が言うと、
「はい…」暗くなった麗香からの返事
「「ちっ」」二人分の舌打ちが聞こえたのは気のせいだろうか。
「まずは学園長からの挨拶です。」司会の2年生らしき人の声で会場が鎮まった。
「皆さんこんにちは、学園長の桃山由子（ももやまよしこ）です。この学園の理念は・・・」
と長い長い挨拶が始まり次には、
「次に副学園長の挨拶です。」
もう学園長の挨拶で疲れたので名前も聞かず俺は寝てしまった。
どれくらいたったのだろうか？いきなり、
「そこの寝ている男子起きなさい！」
会場中に響く声で起こされた。壇上には真由たちと引けを取らない美少女がいた。
「生徒会長をしています。有明美鈴（ありあけみすず）と言います。どうぞよろしくお

願いします。」
周りのやつらは俺を見て笑っていた。
「明、シャッキとしろこのバカ」
真由からも叱られた。そして、
「これで入学式は終了します。入学生は玄関にある組み分け表を見て移動してください。」
「さぁ、行くぞ寝ぼ介鉄拳」
「うるせいよ、新太郎」
「にしてもお前ついてないよなぁ、いきなり有明会長に目をつけられるとは」
「どういう意味なの」と、真由
「あぁぁ、有明美鈴、文武両道、才色兼備、非の打ちどころがなくさらに性格も優しい完璧な人だよ。俺も御近づきになりたいな、つまりあの人に目をつけられると会長の仲間全員に目をつけられんだ、かいそうに」
「いいからさっさと行きましょう」と舞が言ったので、俺たちは自分のクラスに向かった。
「お、おい無視か」新太郎の言葉は無視しよう。眠かったんだ仕方ない。
◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
ホームルーム教室に入ったときの視線が俺には痛かった。二種類の意味で
「やっぱり明さんは有名人ですね」
「やめてくれ麗香、そんなことで有名になりたくない」
「どこに座る？鉄拳」といった瞬間
「やっぱりあいつがあの鉄拳なのか」とか
「入学しけで寝ていたあいつが鉄拳？」とかそんなセリフばっかり飛び交う
ここでやっとだが「鉄拳」の説明をしておく、俺は一様道場の人間なので武術をやっているが俺は弓道、剣道柔道、空手、さまざまな

武術いやもう、スポーツをやってこの街の不良たちを一掃したことがある。その時、ついた名前が鉄拳なのだ。ちなみに俺に二つ名があるように新太郎にも二つ名があるそれが「データバンク」
こいつは学校のありとあらゆる情報を集めてたまに売っているのだ。入学式のとき情報収集時間がすくにことも嘆いていたんじゃないかと今思ったところで、
「着席しろー」
教師が来たので俺たちは出席番号に従い座った。
「この1年E組の担任の有明琴美（ありあけことみ）だ、よろしく」
「有明って会長の関係者かな」
「美人だし会長の身内なんじゃない」
「はぁ～、私は生徒会長の姉だ、さて普通は自己紹介などをするところだが私は昨日のうちにお前たちの顔と名前は覚えたのでこれから休み時間などを使って交流を深めろでは規則や施設について説明する」
俺は先生の説明を聞き流して終わりを待っていた。
「では今日はここまで速やかに帰宅しろ」
「明、帰ろうよ」と先生がでていってからすぐ真由と舞と麗香が来た。男子の目が痛かったのは仕方ないとして、女子の残念そうな目は何なのだろうか？
「明たち悪いが俺は少し用があるから、じゃな」と新太郎は教室を出て行った。大方情報収集に行ったんだろう。本当に暇人だと思う、俺は一度もあいつの情報に助けと貰った覚えはないのだが。
「じゃいくか」
◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
俺の家から学校までは歩いて約３０分ほどだ。この時間が一番好きだったりするが今日ほどこの３０分を恨んだことは後にも先にも似ような気がする。いやうやむべきは自分かもしれない。この会話振った自分が一番悪い
「ねぇねぇ、麗香はいい男見つけた？」と舞

「え、私ですか。別にあまり意識していないので…」と麗香の返事に、
「そうゆう舞はどうなのよ」で真由
「私はやっぱりねぇ」
「なぜそこで俺は見るんだ舞？」
「別に～、でもいい男少しはいたよ例えば…」と舞が語りだしたので俺は、
「喫茶店でゆっくり話さないか？」
「そうねそうしようか？」と俺と同じく舞の話が長いと思った真由が賛同
「私もそれで構いませんよ」続いて麗香の賛同
というわけで喫茶店に入ったことを後悔した。そうとてもとても。
◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
喫茶店に入ってすぐのこと、飲み物を注文した後俺は裏路地に不良らしき3人組が女子を連れていくのは見つけた。少し心配になったので、
「俺ちょっとトイレに行くは」
「うん、分かった」と一様真由に言って俺は裏路地に行った。
◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
裏路地に入ると危うい予感がした。
「離してください、何なのようですか？」
「うるさいな、おとなしくついてこい」
「やめて、離してよ！」
予感ではない状態なのですぐに現場に踏み込んだ
「離してやれよ、その子嫌がってるだろ」
「なんだ、お前はよっ」て言いながら殴りかかってきたのでそれをかわし鳩尾に一発決めてやったら
「御、おいこいつ鉄拳じゃん」
「やばい逃げるぞ」
倒れたやつを連れて逃げてしまったので女子のほうに行くと、

「ありがとう」と言われてその顔を見たとき俺に衝撃が走った
「会長？」と間抜けな声を出してしまった。
「あ、入学式で寝ていた男子じゃない」その覚え方はやめてほしいので
「俺の名前は天上時明です。」
「ま、とにかくありがとう。おかげで助かったは」
「どういたしまして」
この会話は中断さえたのは一人の声だった。
「姉御！」
と言って俺と会長の間に割って入ったのはがたいのいい男だった。
「お前が姉御に手を出したのか、許さん！」
いきなりの攻撃をかわして誤解を解こうとする
「いや違いま」
「うるさい問答無用、だりゃー」
「よっと、それ」
男の腹に一撃決め、男ダウンさせたあと待っていたのは、
「私が姉御って呼ばれていること、誰かに言ったら許さないわよ」
「は、はい」
その剣幕で即答してしまった。
「あの家まで送りましょうか？」
「結構」
「い、いやでも」
「なら家について他言無用、いいわね？」
「了解」
ということで、会長を家まで送るべく歩き出した。その途中会長に家についての口止めを何度もされた。理由はすぐに分かった。
◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
「でっけぇ」
最初の感想はこれしか二だろうというぐらいの大きさでなぜか表札には「有明組」と書いてあった。

「この有明組って何ですか？」
「行くわよ」
あれの質問は軽くスルーされた。
で、門を開けると、
「姉御、お疲れさんス！」
「「「「「お疲れさんス！」」」」」
大量のさっき倒したような男たちがいて、全員で頭を下げていた。
俺は言葉を失った。
「ただいま」
「姉御、その男は誰ですかい？」
「もしかしてストーカーか、こら」
いきなりガンつけられてしまった。ここで俺はビビらず（鍛えて俺ならこの程度）弁解しようとしたところで
「彼は違うは助けてくれたのよ」
会長が凛とした声で全員に行った。俺まで少し緊張してしまった。
「そうだったんですか！」
「「「「「ありがとうございます、兄貴」」」」」
と、ここで会長にやったのと同じように頭を下げてきたので、
「いえいえ、別に大したことは」
「あ、そうだ宮田迎えに行って」
「どうしてですか姉御？」
「彼が宮田を一発で倒しちゃって、喫茶店前の裏路地でのびてるから」
「宮田さんを倒すなんて、すごいですね兄貴」
「兄貴はやめてください」
「とにかく早く行く」
「は、はい」
ぞろぞろと男たちがいなくなった後で
「じゃ、おれはそろそろ」
「え、もういくの、やっぱ嫌だった？」

「待ちなさい、少年」
俺が答える前に自然に背筋が伸びるような声がしてきた
「御父さん」
「はじめまして、美鈴の父、義三(よしぞう)です。」
「よろしくお願いします」
と挨拶の後、
「バシッ」
「御父さん、何しているの？」
「何の真似ですか」
いきなり義三さんの拳が来て、あたる寸前で俺は受け止めた。しかしかなりの威力だぞ、この人何なんだ
「やるな、少年」
「今日は失礼します、会長今日のことは他言はしないので」
俺はさっさとここから立ち去りたかった。何されるかわかったものではない。
「全く何なんだ、あの家？」
その後喫茶店にいた真由たちに長い説教をくらい、帰宅した
その日はすぐに寝てしまった。いきなり2度も殴られそうになったし、2回目の威力は半端ではなかったという理由で。
◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
次の日、昼休みに事件は起こった。
「天上時君はいるかしら？」
瞬間クラス全員が固まった、なぜなら
「か、会長」
「鉄拳に何の用なんだ？」
会長は俺に向かって真っすぐにやってきた。そして
「ごめんなさい」
「はぁ」
つい間抜けな声を出してしまった。
「その昨日のこと、本当にごめんなさい」

「いいですよ、会長が気にするほどのことじゃありませんから」
「ありがとう、その相談があって」
やけにもじもじし始めた会長、クラスの視線が痛いから早くしてほしいのに、
「あのまだ何か？」
極力とげのない言い方にすると
「じゃ、私の許婚になってください」
「・・・・・・・・・・・・・」
数秒の沈黙、
「「「「「えええぇーーーー」」」」」
「何なんだ？」

俺とみんなは高校生（後書き）

本当に駄文ですいません。これからもがんばっていくのでよろしくお願いします。

俺と彼女は同居中（前書き）

今回は少し短いような気がしますが、なるべく眼そこには目をつぶってください。
では、本編へどうぞ。

俺と彼女は同居中

昼休みは俺の常識では和やかなはずなのに今日に限ってその幻想は砕かれてしまった。
「許婚になってください」
このセリフの意味を理解するのに俺は3秒ほどかかった。
しかも真由や舞が冗談半分で行ったのであればまだ流すこともできた、しかし言ってきたのは泣く子も黙る生徒会長・有明美鈴その人だ。勿論クラスの男子、女子を問わず
「「「「「えええーーーー」」」」」
俺はこの顔が眼もあてられないくらいに真っ赤になった上級生に、
「何なんだ？」
という返事を返すのがやっとだった。当の会長様は、
「あの、これ私の電話番号とメルアドだから、それじゃ」
と言って脱兎のごとく逃げ去った。そのあとに俺の身に起きたことは言いたくないが、例をあげると真由と舞に問い詰められて、そのそばでは麗香が逃がさないようになのか俺の背後で仁王立ちのポーズをとっていた。
そんな精神攻撃を俺は昼休み終了まで受けていた。（余談だがいちばんムカついたのは新太郎の「俺の情報収集力は足りなかったのか」と俺を助けるという選択肢を全く窺わせないせりふだった。）
だが今日の波乱はここからだったことを俺はそのあと思い知ることになる。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
放課後、ホームルーム終了の合図とともに全力で俺は魔の巣窟（学校）から逃げだした。後ろからざわめく声や視線をすべて無視することができた俺は素晴らしいと自分でほめられる。だから「待て」とか「逃げるな」などの単語は俺の耳に一斉入っていない。
そして俺は家の前で感動していた。こんなにも我が家を楽しみにし

た日はほかになかったのだから。
「あ、でも会長平気なのかな？」
と俺はここで柄にもなく人の心配をしてしまった。
「ま、原因作ったのあの人だし、どうでもいいか」
一人で納得して家に入る。そして一直線に道場へ向かった。
「おーっす」
道場の木戸をあけて、中をのぞくと案の定門下生が一心不乱に竹刀をふるっていた。俺に一番最初に気がついたのは門下生ではなく、道場の一番奥で指導をしていた妹の天上時瑠璃（てんじょうじるり）だった。
「おかえりなさい、兄さん」
我が妹は率直にいえば俺とは出来が違う。こいつは中学三年で生徒会長をやっている（会長と同じ立場だ）。
それだけでなくとそのほかの部分も会長と似ている。例えば、頭脳明晰、容姿端麗、性格もいいというところだ（「ていうか全部じゃね？」という突っ込みは無視する）。だからたまに瑠璃は本当に俺の妹なのかと思うことがある。そんな妹と俺は、
「よっし、今日も稽古するか」
「珍しいね、兄さんが自分から稽古しようだなんて。学校でさっそく何かあったの？」
（自分から）と（さっそく）という部分が強調されている気もしたがそれはこのさい無視した。
「とにかうはじめようぜ」
「がんばれ、瑠璃さん」
「負けるな、瑠璃さん」
「好きです、瑠璃さん」
なぜだか瑠璃だけ声援（余計な声援は無視して）を受けている気がしたが無理もない我が道場の門下生のほとんどは男子でしかもすべてといっていいほどの人数が瑠璃と姉・天上時渚（てんじょうじなぎさ）のファンなのだから。
「大人気だな、瑠璃」

「ありがとう」
ちなみにこのありがとうは俺へではなく（俺へであっても嫌味だが）声援を送る門下生たちへである。
「行きますよ、兄さん」
「おぉ、来い」
ちなみに「鉄拳」のあだ名はだてではなく俺はこの道場では一番強いはず、なのだ。それは確かめようとしたところで、
「明さ～ん、お客さんですよ～」
と、とても陽気な声が聞こえて俺と瑠璃の間に合った緊張感は一瞬で消え去った。
「分かった今すぐ行く」
今の時間は６時ごろ、新太郎や真由なら姉さんが名前で言うだろうしいったい誰だ？
「じゃ悪いが、瑠璃また後で」
そんな事を思いながら瑠璃に断りは入れ小走りで玄関へ向かった。

玄関を開けて俺は激しく動揺した。
「か、会長？なんでこんなところに」
そこには俺の昼休みを嫉妬と怒りの空気に変えた張本人、有明美鈴がいた。
「家でくつろいでいたら、お父さんに呼ばれて「花嫁修業に行け」って言われて・・・」
「いや意味がわからないですし、分かりたくもないんですけど」
「だからここに住んで交流を深めろって言われたんです！」
「あのまずですね俺はあなたの許婚になるなんて言ってませんよ」
「私だって２０人いた候補をすべてやめてあなたにしたお父さんの真意が分かりません」
「候補ってなんよ」
「私の許婚です！」
しかしこの争いは瑠璃のおかげで一時休戦になった。

「兄さん、門下生帰ったから片づけ手伝って」
「分かった今行く、会長家の中で待ってください」
と俺は会長に言い残してこの場を切り抜けた。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
しかし片づけ後の居間の雰囲気は俺には耐えがたいものだった。瑠璃は何も言わずに会長を見ているし、姉さんはくすくす笑って何も言わないし、張本人の会長は黙って瑠璃を見返している。それで俺はそわそわしながら正座して日残に目を落としていた。やがて瑠璃がやっと口は開き、
「それで、明兄さんこの方は」
瑠璃が兄さんのまえに明をつけているときは怒りの表れだ！しかしここで屈すれば俺は一生妹に頭の上がらないダメ兄貴になってしまう（大げさな　ｂｙ夢見る卵）なので、
「この人は桃山学園生徒会長有明美鈴先輩だ」
「あら、生徒会長さんなんですか」
「えぇ、まぁ」
この雰囲気でいつものテンションを維持している姉に俺は敬意を表する。大げさなと思ったあなた本当になぜかそんな雰囲気なんですよ！
「ではなんでその生徒会長さんが明兄さんになんのようですか？」
なぜ瑠璃がここまで機嫌を損ねているのかはわからんが最初に見たときからまともな説明をしていないからだということだろう。（ちなみに瑠璃の会長を初めて見たとこの感想は「誰」ではなく「美人」だった）
「実は、私の父有明義三が天上時明さんを私の正式な許婚として認定してしまったので」
「許婚！」
「あらまぁ」
頼む、姉さんもっと驚いてくれ
「それでいっしょに住めと、言われまして」

「あのさっきも言いましたけど会長、俺はあなたの許嫁になんてなった覚えはありませんよ」
「で、でもですね、お父さんがとにかくここで住めと言って一歩も譲らないんですよ」
「私は反対です、ですよねお姉ちゃん」
いいぞ、瑠璃、家族が反対ならさすがにあきらめるだろう。しかし、
「私は別に構いませんよ」
「お姉ちゃん！」
「姉さん！」
「だってこんなにもかわいらしい人と住めるなんて嬉しいですよね明さん？」
「いや、うれしくないこともないけど」
この時の瑠璃の視線はいつになく強かった。
「ですから、一緒に住みましょう美鈴さん」
「あ、はい、ありがとうございます」
「え、ちょっと、お姉ちゃん！」
「では晩御飯にしましょう」
「あ、私手伝います」
「では、よろしくお願いしますね」
瑠璃の意見は採用されずに、会長は超険悪ムードを出す瑠璃から逃げて俺が瑠璃の相手をしなければならなかった。
「そんな目をするなって、瑠璃」
「女ったらし」
この火も一瞬で冷えるような声に俺は何も言えず、「私も手伝うよ」
といういつもの妹の声を遠くに聞いていた。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
夕食が終了して、俺が食器を洗っている最中に瑠璃が、
「お風呂沸いたよ」
「美鈴さん入ってきたら？」
「いえ私は居候ですから最後で結構です」

ちなみに会長は今俺の隣で食器を拭いている。
「居候だなんて、天上時美鈴さん」
「姉さん、あまり会長をからかうな！」
「兄さん、顔が赤くなっているのは私の見間違えですか？」
「る、瑠璃何を言っているのだ。俺にはさっぱり分からない」
「とにかく私は最後でいいので」
「じゃ、瑠璃入ってきなさい」
「はーい」
と言って瑠璃はすたすたと風呂場へと向かっていった。
「いいね、こういう家族の会話って」
「えっ」
そういった会長の顔はとても寂しそうだった。
「家はさ、お姉ちゃんは組のやり方にうんざりしたみたいですぐに家を出ていっちゃってあんまり家族の会話ってしたことないんだよね」
「あ、あぁ、そうなんだ」
これが今俺に出来る精一杯の返事だった。たぶん俺はこの会長の顔を忘れないだろう。
しかし、この日は更なるハプニングが俺を待っていた。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
「明さ～ん、瑠璃がお風呂上がったから入ってきて」
ちなみになぜだか姉さんは俺のことを「さん」付けで呼ぶ理由は聞いたことないが、何度やめろと言っても聞く耳を持たないのでもうあきらめている。
「はいはい」
今、会長は部屋の整理をしている。家が世間一般から見れば広いので空き部屋はいくつかあるのだ。そして俺は今日の疲れを文字通りすべて洗い流すべく風呂場へと向かった。俺は風呂場の扉への扉を開けて、硬直してしまった。
「な、何しているんですか、兄さん」

なぜかというと裸の瑠璃が今まさにバスタオルを取ろうとしていたのだった。
「え、あ、いや、その」
完全に思考回路が止まっている俺をしり目に瑠璃は、大声で
「おね」
「お姉ちゃん」と言われる前に俺は瑠璃の口をふさいでいた。俺の力に勝てるわけもなく瑠璃はおとなしくしていた。
「偶々、偶然、見たくて見たわけじゃないからな、いいな」
と俺は小声で瑠璃に弁解する、しかし瑠璃からの返事は意外なもので
「私の裸は見る価値もないということですか？」
そう言われて俺は今の状況を察し、顔がほてるのを感じた。そこでバッドタイミングで
「何しているんですか」
会長がやってきてしまった。俺が発言する前に、
「兄妹の絆を確かめているんです」
真顔で瑠璃がこんなことをいうもんだから、会長は
「そうですか、すいません、お邪魔しました」
「ちょっと会長、そこで納得しないでください」
そこは顔赤くして「ハレンチな」とか言うべきでは？という俺の思考は次の言葉で玉砕された。
「いえ天上時君、私は人の趣味ではなく感性に文句は言いませんよ」
「・・・・」
俺は何も言えなかった。そのあと無理やり会長を留まらせ、瑠璃に服を着るように言い、やってきた姉さんと留まってもらった会長に事情を話して納得してもらえた。会長のコメントは
「女ったらし」
どこからその言葉がでてくるのか俺には不思議だった。
その後、少し考えてみると姉さんは瑠璃が風呂から上がったと言ったということはその様子を見ているはずなのだ（なぜなら姉さんがいたリビングと風呂場は廊下を真ん中に向かい合っているから）。

そこで俺は思考を止め姉さんに聞くと、案の定「私が工作しました」のお答をいただいた。
「ふぅ〜、疲れた」
俺はすぐにベッドへと横になり眠りに落ちたが、俺は明日の朝もっとひどい目に合う。

俺と彼女は同居中（後書き）

いかがでしたか。次もなるべく早く投稿するのでよろしくお願いします。

俺と彼女は密会中！（前書き）

投稿が予定より遅れてしまってすいません。これからもがんばります。

俺と彼女は密会中！

俺はバカだ。と思ったことは人生で一度くらいみなさんあると俺は思っているが、ここまでひどく自分を責めたのは後にも先にもこの時だけだった。

昨日の騒動から一夜明け、次の日の朝

「ふぁ～」

俺は目覚ましの力を借りることなく起きることができた。時計を見ればまだ7時いつも真由に起こされている俺にしては珍しいことだ。

「昨日早く寝たからかな？」

そう思いつつ、自室から朝飯を食べるためリビングへと歩いている最中リビングから言い争うような声が聞こえてきた。

「どういうことですか！」

「まぁ、落ち着いて真由ちゃん」

「で、でも」

「仕方ないですよ、決定事項ですから」

「瑠璃ちゃんまで」

姉さんと瑠璃と真由だ。どうして言い争っているんだろう？と思った俺はさらに（ここで解決すれば昨日の汚名返上ではないか）と確信し、

「おはよう、どうしたん」

挨拶も終わらないうちにいきなり右ストレートを食らった。

「何するんだよ真由！」

「うるさーーーい」

俺は真由のパンチをかわしながら質問を繰り返した。

「どうしたんだよ、真由」

「うるさーーーい」

「うるさーーーい、じゃわかんねぇだろ」

ここで助け船がでてきた。

「そのくらいにしてあげて、真由ちゃん、後からいくらでもすればいいから」
「姉さん今さらりと恐ろしいこと言いませんでしたか？」
「だからね、さっき説明した通りよ」
「無視ですか姉さん」
「納得できません」
「まぁ、私も実際納得してませんしね」
瑠璃まで無視とはもうあきらめよう
「で、どうしたんだよ？」
「簡単でしょ、なんであの人がここにいるのよ！」
「あの人？」
俺は真由の指さす方向を見て、俺は全てを理解した。と同時に俺はバカだと思った。
「真由さん、私がここにいるのは渚さんが説明してくれたとおりです」
「い、いやでもねぇ」
「私だってここに居たくているわけではありません」
（じゃ、帰れよ）とは俺は言えなかったが
「じゃ、ここから出て行きなさいよ」
と俺ではなく真由が言ってくれた。しかし、帰ってきた答えは的外れなものだった
「安心してください。あなたが心配しているような行動はありえませんから」
「こ、行動って何よ」
なぜかいきなり真由の顔が真っ赤に染まった。何を考えたらそんな風になれるのか俺はとても疑問だった。
「では、朝ごはんにしましょうか」
会長はまるでさっきのやり取りがなかったかのように平然と食卓に着いた。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

朝飯（ちなみに会長の料理はなかなかうまかった）が終わり、登校の準備をしていると真由が俺の部屋にやってきた。
「は、入っていい？」
案外しっかりノックしたのに驚いた俺は返事が少し遅れてしまった。
「…あ、いいよ」
「おじゃましまーす」
「なんだ」
「え、えっと」
真由にしては珍しくはっきりものを言わないので俺から話を振った。
「会長のことか？」
「そ、そう。許婚って本当なの」
「あぁ、深ーいわけがあってな」
「その、深ーいわけが聞きたいの」
「瑠璃や姉さんから聞いてないのか？」
「聞いたけど、あんたの口からちゃんと聞きたいの」
「なんでお前がそんなに気にするんだ？　ま、気にしてくれるのはありがたいけどな」
「もういい」
俺の台詞をすべて聞かずに真由は俺の部屋を飛び出してしまった。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
ところ変わって今は通学路、今俺の両隣りには会長と真由がいる。美少女二人に挟まれての登校はとても微笑ましいのだろうが、
「何だ、この空気」
と俺は何度も心の中で突っ込んだ。詳しく解説すると、真由は会長を睨んでいる。会長は俺に「何とかしろ」という視線を送っている。それをどう捉えたのか、さらに真由の視線はきつくなる。
「い、いい天気だなぁ」
俺は無理やり会話をする作戦に出た。が
「くもりよ」

あっけなく終わった。そして、
「おはよーっす、明」
こいつの声を初めて聞いてうれしく思った。
「おはよー、新太郎」
「ど、どうした明。何か今日のお前疲れているみたいだぞ」
「分かってくれるのか、新太郎！」
「な、何を分かればいいんだ？」
「聞いてくれ、実はな…」
しかし俺の叫びは
「あ、有明会長！」
新太郎の熱の入った声でぶった切られた。
「お、おはようございます」
「えぇ、おはよう」
「明、俺は今天にも昇る気持ちだ」
「そのまま天に昇ってろ！」
「ぐはぁ」
真由のかかと落としが新太郎にクリーヒットした。
「そ、それよりま、明昨日の許嫁について詳しく聞かせてもらえるか」←復活早くね！　ｂｙ作者
「えっ」
俺は完全に忘れていた。会長の失態を。
「早く許婚の件について説明をしてほしいな」
「い、いやそれは」
さりげなく会長を見ると、真っ赤になって
「どういうこと」
俺は新太郎たちからはなされて今路地に居る。ていうか会長顔近い。
「なんで彼が私たちのことを知っているの？」
会長の剣幕に押されながらも俺は
「なんでもなにも会長が俺の教室で叫んだんでしょ」
「私が？」

何ですかその全く心当たりがないって顔は。この人案外天然なのか？それともただのバカなのか？
「も、もしかしてあの時？」
「その時以外ないと思いますよ」
「なんでもっと早く対処しないのよ」
「そんなこと言われても困りますよ」
「何とかしないといけないわね」
「そうですね」

「明ー、密会は終わったか？」

「と、とにかくこの話はまた」
「わかりました」
と俺が返事をすると同時に会長は走って行ってしまった。
そのあと俺はやってきた、舞と麗香それと新太郎に事の顛末を話しながら学校に向かった。（その間真由の機嫌はずっと斜めだった。）
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
教室に入ると一気にクラスの視線が俺に集まってきた。
「ま、確かにあんなことがあればねぇ」
「そうですね」
「いいな明」
新太郎の「いいな」の理由は聞かないでおくことにした（聞いてしまうと殴りそうだからだ）。しかしこの空気は本当にやめてほしい。どうにかならないのか？
「でもあの会長が相手じゃぶが悪いはねぇ」
「本当ですね、どうしたらいいんでしょうか？」
「何のぶが悪いんだ？」
「「な、なんでも（ありません）」」
2人ともあわてて否定しているので、追及はしないでおいた。ちなみにこの二人は俺の許嫁事件（勝手に命名した）の顛末をちゃんと

理解してくれた。しかし、真由はずっと不機嫌なままふてくされていた。で、一番
むかつく男の代名詞「川野新太郎」は俺に
「なぁ、なぁ明有明会長に頼んで俺にほかの生徒会役員を紹介してもらえるように手配してくれよ」
「お前、俺の今の状況が分かっているのか？」
「あぁ、一言で言うと」
そこで新太郎は真剣な顔つきになり
「ハーレムだろ」
とぬかしてきた
「はぁ？」
俺はいきなりのことで間抜けな声をあげてしまった。
「なんでそういう風な解釈になるんだよ」
「いやだって、お前の周りは美女ばっかじゃん」
「そうか？」
「会長に、麗香、舞、真由ほらいろいろいるじゃん」
「い、いやそれとこれとは別だろ」
と俺が新太郎の質問攻撃にあてられていると、
「座れ―」
渚先生の合図で新太郎はしぶしぶといった様子で席に戻った。
そしてホームルーム
「今日ではないがいつか生徒会役員を決めるからそのつもりでいろよー」
先生の連絡を軽く流しながら俺はクラスの視線を一身に浴びていた（いつかっていつだよの突っ込みはしないでください）。しかしここで疑問に思ったことがある、なぜクラスのやつらは俺に直接会長とのことを着てこないのだろうか？と新太郎に授業の合間に聞くと、
「お前が鉄拳だらか」
と完璧な回答をもらった。俺はこの時初めて「鉄拳」が役に立ったと感じた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

ところ変わってここは屋上、まだ少し肌寒いが気にするほどでもなかった。では、なぜ俺が屋上に居るかというと、会長に呼び出されたのだ（ちなみに会長がいつ俺の携帯のメアドを知ったのか俺は分からない。勿論俺から送ったことはない）。

「あ、会長」

俺が屋上に着くと会長が手すりもたれながら待っていた。

「…」

不覚にも俺は会長に見とれてしまった。この屋上の青い空と会長の顔がうまく重なりあっていた。

「あら、天上寺君いらっしゃい」

「なんでいらっしゃい何ですか？」

「ここ、普通立ち入り禁止だから」

「・・・」

「先生に所要がありますっていったらすぐに鍵を貸してくれたわよ」

「大丈夫か教師陣」

と俺は校舎一階の職員室に向かって心の声をかけた。

「それで、クラスの反応はどうなの？」

いつになく会長が真剣な目で俺に聞いてきた。

「会長、俺の二つ名を知っていますか？」

「あのさ、話を逸らさないでくれる」

「いいから知ってますか」

「知らないわよ」

「鉄拳です」

「あ、あなたが鉄拳なの？」

「やっぱり知ってましたか」

「え、えぇ、父がこの町で俺と張り合えるのは鉄拳だけだと言っていたわ」

「この名前のおかげでクラスの視線を一身に浴びるだけで止まっています」

「本当にごめんなさい」
「そう思うなら、いい対処法を考えてくださいよ」
俺が少しきつめに会長に言うと、
「そんなこと言われても」
泣き始めてしまったのだ、こんな展開を誰かに見られたらまずいぞ！
「す、すいません。会長少し言いすぎました」
俺の危機管理システムが急いで何とかしろという指令を出している
↑（なんとか）って何？
「い、いいの。私が全部悪いんだから」
どうしてこんな時だけ奥ゆかしくなるんだよ！俺は会長の家出のギャップで戸惑っているところへ

「何してるの！」

俺と会長はそろって声がするほうへ振り向いた。このとき俺は何も言えなかった。俺はこんなときにその格好は寒くね？とか考えていたが会長は
「が、学園長」
やってきたのは学園長の桃山由子だった。
「そこの男子生徒何をしようとしたの？」
「学園長早く二人を離したほうがいいのでは」
「そうですね」
俺はそこで学園長の隣にいる男に気がついた。
「い、いえ。副園長、そんなやましいことは何もありません」
「副園長？」
「もしかして君、私のことを覚えていないのかね？」
「そ、そんなことありませんよ、副園長」
「ならそこの男子彼の名前は？」
「・・・」
俺は何も答えることができなかった。

「天上寺君、ほんとに覚えてないの！」
会長の声が耳から離れません。学園長はため息をついている。そんで張本人の副園長は
「ほんとにあなたには呆れました。天上時明さん、私の名前は山岡秀雄です。覚えておくように」
「は、はい」
「それより学園長どうしてここに」
「あぁ、それはですね。匿名で学園長が屋上に連れ去られたという手紙が来ていまして副園長と一緒に様子を見に来たわけですよ。そしたらこのあり様だったということです」
「ですから、これは本当に不幸な事故でして」
「しかし現に有明君きみはそこの男子に泣かされている。これは看過できない状況だ」
俺はこの時さっきは名字で呼んでたのに（そこの男子）にされてしまった。と考えていた。
「ま、今日のところはいいでしょう。早く教室に戻りなさい。」
「わかりました。ありがとうございます、学園長、副園長」
「ありがとうございます」
その後はないごともなく一日が終わった。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
次の日、俺は愕然とした。
校門前にある掲示板、普通そこには行事などの連絡が載っているが今日は

通知
以下のものを今日より一週間自宅謹慎とする
天上寺明
学園長　桃山由子

「なんでー」

俺と彼女は密会中！（後書き）

どうでしたか？喜んでいただけたなら幸いです。ではまた次回。

俺と彼女は謹慎中？（前書き）

投稿が遅くなってほんとにすいません。これからできる限り早くやります。
早くも滞っている自分の才能がほんとに…と悲観的な思いを持っていますが本当に早く投稿できるように頑張ります。

俺と彼女は謹慎中？

俺が掲示板を見て絶叫する前の日
この日は本当に何もなく平和だった。あったとすれば、少しだけ会長の帰りが遅かったという事ぐらいだったあとは少し落ち込んでいるように見えた。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
そんなこんなで何事もなく通学路を通っていつものように学校に来てみると謹慎通告が来ていた。
そして今、
「何をしたんだ？明」と片手に手帳もう片方にペンを持った新太郎が聞いてきた。
「答える前に新太郎一ついいか？」俺は平静を装って聞いてみると、
「すぐにメモって知りたいやつらに売る」普通に何の悪気も感じられない答えが返ってきた。
「それにしてもあんた本当に何したのよ？」真由が俺の顔を覗き込んで聞きさらに
「私も知りたい何をしたの？」「何をしたのですか？」次に舞と麗香
「いや本当に分からないんだって」と俺は弁解するが
「だったらなんで掲示板にお前の名前が載ってるんだよ」と痛いところを突く新太郎
「うるせぇ、知ってても友を売るようなやつには教えないね」俺は精一杯の反論をする
「まぁ、とりあえず教室に行きませんか？」と麗香が言ったので
「そうね」と掲示板をまだ見ている真由を半分追いやって俺たちは教室に向かった。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
俺たちが教室に入ると案の定俺についての話題で教室はてんやわん

やだった。
クラスの中には「やっぱりやったか」とか「ついにやったな」とかの言葉が飛び交っていた。俺はそれにうんざりしながら席についた。この学園に入学して以来、俺は真由たち以外に友達と呼べるようなやつはいない。全員、俺の二つ名である「鉄拳」にびびっているからだ。とまぁ、そんな風に謹慎からの現実逃避をしていたら先生が来た。
「よーし、お前ら席につけ！　ホームルーム始めるぞ」
このホームルームも俺にとって最大の危機であることに俺はこの時、気ずいていなかった。
「それじゃあ、まず天上寺お前これが終わったら学園長室へ行け。今日はそれだけはい、ホームルーム終わり。一限の準備しろよ～」
この連絡が危機であったわけではない。ここからだった。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
ホームルームが終わり今俺は「学園長室」と書かれた部屋の前にいる
「はぁ～」とついため息が出てしまう。全く心当たりがない時にこういう呼び出しは本当に避けたい。
ていうかまだ学校が始まって3週間しか経ってないんだぞ、どうすんだ俺？考えてもはじまらないので、
「失礼します。1年1組の天上寺明です。」
「どうぞ」という静かな声が返ってきた。
「失礼します」
俺が部屋に入ると昨日屋上であった桃山学園長と、山岡副園長がいた。
「呼び出しの理由はわかりますか？」と学園長
「知るかばばぁ」とは言えないので
「いえ、心当たりがありません」と一様丁寧に言っておく
「昨日の一件はやはり看過できなかったからです。」とさらりと言った副園長
「な、何でですか昨日のあれは誤解だったとわかってくれたんじゃ

ないんですか？」
「同じことを有明君にも言われましたがこれは決定事項です」
「会長が俺の処分の撤回を？」
「えぇ、そうよ。自分のせいだからあなたには関係ないって直談判に来たわ」
「本当なんですか、学園長」
そこで学園長は鋭い目になり、
「それでもこれは職員会議決定したことです。変更はありません。」
「じゃ、何で俺はここに呼ばれたんですか？まさか処分撤回ができないことを分からせるためじゃないんでしょう？」
「その通りです。天上寺君、あなたのことは校内で有名になっています。」
何か副園長の目が険しくなり
「暴力的で態度が悪く女性に無理やり何かをさせようとするなどです。」
「いや、俺が何したっていうんですか？」
「あなたが有明さんに許婚になってくださいって言わせたんでしょう！」
「は、違いますよ何を言ってるんですか！」
感情むき出しの学園長が意味不明なことを言うと、副園長が
「その通り何人かの生徒からもそのような報告を受けています。」
「だったら今ここに会長を連れてきて証言してもらいます。」
「どうぞ、どうぞ」と副園長が余裕で言うので
「失礼します。」
俺は学園長室を飛び出し会長のクラスへ向かった。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
会長のクラスへ向かう途中に一時間目が始まるとこに気がついた俺は
「後でもいいか」と思い教室に戻った。
一時間目は数学で俺の大嫌いな科目だった。あくびをかみ殺しながら聞いていると、

「おい、明」と隣の新太郎が隣から話しかけてきた。
「なんだ」と俺が答えると
「お前さ、朝の呼び出し結局なんだったのか当ててやろうか？」
満面の笑みを浮かべながら新太郎が言うので
「じゃ当ててみろよ」と俺が言うと、
「謹慎についてだろ？」当り前な答えを返してきた。
「そんなの当たり前だろ」と俺が返してやると、
「さらに無理やりお前が言わせたとかも言われたんだろ？」
「な、なんで知ってるだ」
危うく俺が怒鳴りそうになるのを抑えて聞くと、
「データバンクのあだ名はだてじゃねぇんだよ」と言ってきた
「誰がそんなことを校内で言っているかしてるか？」
「あぁ、知りたいか？」
「もちろん知りたい」
「今度なんかおごれよ、２年の会長のファンクラブが学校内でばらまいていたらしい」
「ファンクラブ？」と俺がすっとんきょうんを上げると
「そこ静かにしなさい！」と教師の怒鳴り声が飛んできた。
数分後、新太郎が
「さっきの話の続きだけど、会長のファンクラブはお前を学校から追い出したいらしい」
「俺が気に食わないからか？」
「その通りだ。」
俺が呆れていると、
「その話本当かよ、川野」後ろの席から誰かが声を掛けてきた。
「あぁ、ほぼ間違えなく本当だ。」と新太郎も答えている。
俺が振り向くと、
「ひぇ！」
あからさまにおびえて視線を外された。
「本当にお前って不良の撲滅しただけなのにこんなに脅えられてい

るんだな」
「誰が情報を捻じ曲げたのやら」
「そんなことわかれないさ」
「それより差、あれ誰？」
「お前クラスメートの名前覚えてないのかよ？」
「お前ら以外は覚えてない」と俺が言うと、
「さっきのやつは本田信だ、知らないのか？サッカー部の時期エースとまで言われてるんだぞ」
「へぇ～、そうなんだ」
「そんなことよりお前これからどうすんだよ。」
「この授業が終わったら会長のところ行って学園長に俺の無罪を言ってもらう」
「うるさいぞ」
また教師怒声が飛んできたので、俺と新太郎はそこで会話をやめた。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
一事件目と二時間目の休みに俺は会長がいる2年3組に行ったが、会長はおらず近く女子生徒に聞くと
「さっき屋上に綾峯君といったよ」と普通に答えてくれた。
1年のクラスより居心地がいいかもしれないと俺は考えてしまった。
「名前教えてくれる？美鈴に言っておくから。」と親切に言ってくれたので、
「あ、はい。1年1組の天上寺明です。」
「わかった。天上寺君ね、伝えておくわ」
「ありがとうございます。」
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
そして、2、3、4時間目のあと、会長クラスに行ったが、会長は常に
「屋上に行ったよ」
の繰り返しで、昼休みも過ぎそして放課後も結局
「屋上に行ったよ」

と言われたので俺も行こうとしたが
「駄目だよ、話の邪魔しちゃ」と俺が会長の居場所を聞くたびにこたえてくれていた柚村さんが言ったので俺は放課後まで待ったが結局会長は見つけられなかった。
「どこいってんだよ、会長」
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
その夜、結局謹慎が決まり家にいた俺のところへ
「しつ、ただいま」とぎこちないあいさつで今日ほぼ一日探し回った。会長が帰ってきた。
「会長、話があるんだけど」
「えぇ、いいわよわたしもあるから」と会長はいい俺たちは煮貝の俺の部屋に移った。
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆
「じゃあ、おれから話していいですか？」
「いいわよ」
「今日、会長どこにいたんですか？」
「は？」
これが会長と俺の戦いの始まり？なのだ！

俺と彼女は謹慎中？（後書き）

サブタイトルとマッチしていない気もしますが感想よろしくお願いします。
賛否両論大歓迎です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0219y/

俺と姉御は｜許婚《いいなずけ》！

2011年12月25日02時46分発行